

Q. 変数が3個(以上)のとき、極値の判定はどのように行えばよいのでしょうか。

A. この質問の答えには1年秋学期の「線形代数の応用1」の知識を必要とする。以下の解説で不明な点はそれらを学習してから考え直してほしい。まず、答えを要約する：

ヘスの行列をつくり、その固有値がすべて正なら極小、すべて負なら極大、正負が混在するなら極値ではない

2変数の場合、ヘスの行列式は2つの固有値の積に一致し、固有値が同符号であることと行列式が正となることが同値である。3変数以上では、固有値がすべて正ならば行列式が正であるが(その逆は必ずしも成り立たないなど)、行列式の値から固有値の正負を論じることはできない。

●ここでは3変数関数 $f(x, y, z)$ について説明する。3変数以上への拡張は自明なので省く。

●記号の整理

・変数をベクトルとして扱う： $\vec{r} = (x, y, z)$ およびその微分 $d\vec{r} = (dx, dy, dz)$

・関数： $f(\vec{r})$

・最大傾斜を表すベクトル： $\nabla f = \left(\frac{\partial f}{\partial x}, \frac{\partial f}{\partial y}, \frac{\partial f}{\partial z}\right)$, および ナブラ演算子： $\nabla = \left(\frac{\partial}{\partial x}, \frac{\partial}{\partial y}, \frac{\partial}{\partial z}\right)$

・全微分： $df = \frac{\partial f}{\partial x} dx + \frac{\partial f}{\partial y} dy + \frac{\partial f}{\partial z} dz = \left(\frac{\partial f}{\partial x}, \frac{\partial f}{\partial y}, \frac{\partial f}{\partial z}\right) \cdot (dx, dy, dz) = \nabla f \cdot d\vec{r}$ (「 \cdot 」は内積を表す)

●極値の判定条件

・点 \vec{a} が $f(\vec{r})$ 極値であるならば、 \vec{a} における $f(\vec{r})$ の接[超]平面が変数の座標[超]平面と平行になる：
 $\vec{r} = \vec{a}$ において

$$\nabla f(\vec{a}) = 0 \quad \text{すなわち} \quad \frac{\partial f}{\partial x} \Big|_{\vec{r}=\vec{a}} = 0 \quad \text{かつ} \quad \frac{\partial f}{\partial y} \Big|_{\vec{r}=\vec{a}} = 0 \quad \text{かつ} \quad \frac{\partial f}{\partial z} \Big|_{\vec{r}=\vec{a}} = 0$$

が成り立つ必要がある。しかし、これらだけでは極値になるか鞍点になるか不明である。

・極値を与える点の候補である \vec{a} から $\vec{a} + \vec{h}$ まで直線的に移動して関数値の変化を観察する。 \vec{h} の向きをどのようにとっても関数値が増える(減る)とき \vec{a} は極小(極大)の点となる。

・ \vec{a} から $\vec{a} + \vec{h}$ までの移動を媒介変数 t により表現する：

$$\vec{r}(t) = \vec{a} + \vec{h}t, \quad t: 0 \rightarrow 1$$

1変数関数 $f(t)$ を定義する：

$$f(t) = f(\vec{a} + \vec{h}t)$$

・ $f(t)$ のマクローリン展開：

$$f(t) = f(0) + \frac{df}{dt} \Big|_{t=0} t + \frac{1}{2} \frac{d^2f}{dt^2} \Big|_{t=0} t^2 + \dots$$

$\frac{df}{dt} \Big|_{t=0} = 0$ である。実際に、全微分 $df = \nabla f \cdot d\vec{r} = \nabla f \cdot \frac{d\vec{r}}{dt} dt$ より

$$\frac{df}{dt} = \nabla f \cdot \frac{d\vec{r}}{dt} \rightarrow \nabla f \cdot \vec{h}$$

となり、極値の候補では $\nabla f(\vec{a}) = \nabla f|_{\vec{r}=\vec{a}} = 0$ より

$$\frac{df}{dt} \Big|_{t=0} = \nabla f|_{\vec{r}=\vec{a}} \cdot \vec{h} = 0$$

よって、マクローリン展開は

$$f(t) = f(0) + \frac{1}{2} \frac{d^2 f}{dt^2} \Big|_{t=0} t^2 + \dots$$

である。 $\frac{d^2 f}{dt^2} \Big|_{t=0}$ が \vec{h} によらず符号を変えないことが、極値となるために必要な条件となる。

• 2階導関数 $\frac{d^2 f}{dt^2}$:

1階導関数は

$$\frac{df}{dt} = \nabla f \cdot \frac{d\vec{r}}{dt} = \nabla f \cdot \vec{h}$$

であるが、 ∇f が $\vec{r}(t)$ の関数であることから、2階導関数を求めるには上式の f のところに $\frac{df}{dt}$ を代入し

$$\frac{d^2 f}{dt^2} = \frac{d}{dt} (\nabla f \cdot \vec{h}) = \nabla (\nabla f \cdot \vec{h}) \cdot \vec{h}$$

成分で表示すると煩雑になるため、 (x, y, z) を (x_1, x_2, x_3) と書きなおし総和記号を用いると

$$\nabla f \cdot \vec{h} = \sum_{j=1,2,3} \frac{\partial f}{\partial x_j} h_j$$

$$\begin{aligned} \nabla (\nabla f \cdot \vec{h}) \cdot \vec{h} &= \sum_{k=1,2,3} \frac{\partial}{\partial x_k} (\nabla f \cdot \vec{h}) \cdot h_k = \sum_{j=1,2,3} \frac{\partial}{\partial x_k} \left(\sum_{j=1,2,3} \frac{\partial f}{\partial x_j} h_j \right) \cdot h_k = \sum_{j=1,2,3} \sum_{k=1,2,3} \frac{\partial}{\partial x_k} \frac{\partial f}{\partial x_j} h_j h_k \\ &= \sum_{j,k=1,2,3} \frac{\partial^2 f}{\partial x_k \partial x_j} h_k h_j \end{aligned}$$

を得る。

- j, k が 1 と 2 だけを動くとき、2変数関数の極値判別に用いた式となっていることに注意せよ。
また、 $n (> 3)$ 変数のときには j, k を 1 から n まで動くとするれば、まったく同じ式となっている。

• 結論 :

$$\frac{d^2 f}{dt^2} \Big|_{t=0} = \nabla (\nabla f \cdot \vec{h}) \Big|_{\vec{r}=\vec{a}} \cdot \vec{h} = \sum_{j,k=1,2,3} \frac{\partial^2 f}{\partial x_k \partial x_j} \Big|_{\vec{r}=\vec{a}} h_k h_j$$

が、 \vec{h} をどのように選んでも符号が変わらないならば、点 \vec{a} は極値を与える。

以上、2変数のときとまったく平行に議論が進んだ。

●ヘスの行列

- 上の結論の下線部と同等の内容を、 \vec{h} を用いずに表現したい :

$\frac{\partial^2 f}{\partial x_k \partial x_j} \Big|_{\vec{r}=\vec{a}}$ を (j, k) 要素とする「ヘスの行列」

$$H = \begin{pmatrix} \frac{\partial^2 f}{\partial x_1^2} & \frac{\partial^2 f}{\partial x_1 \partial x_2} & \frac{\partial^2 f}{\partial x_1 \partial x_3} \\ \frac{\partial^2 f}{\partial x_2 \partial x_1} & \frac{\partial^2 f}{\partial x_2^2} & \frac{\partial^2 f}{\partial x_2 \partial x_3} \\ \frac{\partial^2 f}{\partial x_3 \partial x_1} & \frac{\partial^2 f}{\partial x_3 \partial x_2} & \frac{\partial^2 f}{\partial x_3^2} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} f_{xx} & f_{yx} & f_{zx} \\ f_{yx} & f_{yy} & f_{yz} \\ f_{zx} & f_{zy} & f_{zz} \end{pmatrix}$$

を観察する。

- この行列の特徴は $\frac{\partial^2 f}{\partial x_k \partial x_j} = \frac{\partial^2 f}{\partial x_j \partial x_k}$, すなわち実対称行列である (実数を要素とし転置に対して不変)。

- ・判定条件の式

$$\left. \frac{d^2 f}{dt^2} \right|_{t=0} = \sum_{j,k=1,2,3} \left. \frac{\partial^2 f}{\partial x_k \partial x_j} \right|_{\vec{r}=\vec{a}} h_k h_j$$

を、ベクトル \vec{h} と、 \vec{h} に H を演算した結果であるベクトル $H\vec{h}$ の内積、すなわち $\vec{h} \cdot H\vec{h}$ と読みなおすことができる。線形代数の記法にしたがうと、 \vec{h} を縦ベクトル、 ${}^t\vec{h}$ を横ベクトルとして

$$\left. \frac{d^2 f}{dt^2} \right|_{t=0} = \sum_{j,k=1,2,3} \left. \frac{\partial^2 f}{\partial x_k \partial x_j} \right|_{\vec{r}=\vec{a}} h_k h_j = {}^t\vec{h} H \vec{h},$$

である。

- ・線形代数の定理によると、実対称行列は直交変換 R (すなわち座標回転) により対角行列 $D = RHR^{-1}$ となり対角線上には実数の固有値 $\lambda_1, \lambda_2, \lambda_3$ が並び、他の要素がすべて 0 となる:

$$D = \begin{pmatrix} \lambda_1 & 0 & 0 \\ 0 & \lambda_2 & 0 \\ 0 & 0 & \lambda_3 \end{pmatrix}$$

- ・ベクトル \vec{h} を R により回転したものを $\vec{h}' = R\vec{h}$ とすると

$${}^t\vec{h} H \vec{h} = {}^t\vec{h} R^{-1} R H R^{-1} R \vec{h} = {}^t\vec{h} R^{-1} D R \vec{h} = {}^t(R\vec{h}) D (R\vec{h}) = {}^t\vec{h}' D \vec{h}' = h_1'^2 \lambda_1 + h_2'^2 \lambda_2 + h_3'^2 \lambda_3$$

である。

- ・「どのような \vec{h} についても」という条件を「どのような $\vec{h}' = R\vec{h}$ についても」と読み替えると、 \vec{h}' によらず

$$\left. \frac{d^2 f}{dt^2} \right|_{t=0} = {}^t\vec{h}' D \vec{h}' > 0 (< 0)$$

となるのはすべての固有値が正 (負) のときに限る。正は極小、負は極大のときである。

- ・2変数のとき、ヘスの行列は

$$H = \begin{pmatrix} f_{xx} & f_{xy} \\ f_{yx} & f_{yy} \end{pmatrix}$$

である。これを対角化して

$$D = RHR^{-1} = \begin{pmatrix} \lambda_1 & 0 \\ 0 & \lambda_2 \end{pmatrix}$$

となったとき、その行列式は

$$\det D = \det RHR^{-1} = \det R \times \det H \times \det R^{-1} = \det R \times \det H \times \frac{1}{\det R} = \det H$$

$$\det H = \det D = \det \begin{pmatrix} \lambda_1 & 0 \\ 0 & \lambda_2 \end{pmatrix} = \lambda_1 \lambda_2$$

したがってヘスの行列の行列式が正ならば、 $\lambda_1 > 0$ かつ $\lambda_2 > 0$ となり極小、あるいは $\lambda_1 < 0$ かつ $\lambda_2 < 0$ となり極大である。

以上